

今ヨリ ナキニ

中野 孝次

今年(二〇〇一年)の春から、わたしの作品集十巻を作品社という小出版社が出版してくれている。その広告に、全巻一時払いの方には中野直筆の色紙を差しあげる、と作品社の営業部が書いたので、わたしは色紙を何百枚も書かされるハメになった。

たくさん書くのだから短くて、しかも今のわたしの考えをじかに表わしたものでなければならぬ。そこで、きんさん考えてわたしが選んだのが「今ヨリ ナキニ」という言葉だった。これは柳宗悦の『南無阿弥陀仏』(岩波文庫)という本の中に「道儂」として掲げられている偈の一つで、前々から気に入っていたのだ。

浄土宗の本義を説く一つのでたとしてあげられているのである。意味は、人が生きていくところは「今ココニ」しかない、ということである。このことは、わたしが今年八月に行われた浄蓮寺・無明塾でもつばらそのことのみを話したが、仏教の精髓を示す言葉だと思う。

柳宗悦は一般に民芸運動を始めた人として知られ、この人が仏教にも深く入って、浄土宗についてみごとに著書を出していることは世間でほとんど知られていない。しかしこの『南無阿弥陀仏』は、浄土宗の本来の意義をわかりやすく説きあかして、しかも非常に意味深いくれた本だ。そこにこの「今ヨリ ナキニ」が、

無限の遠い過去から、果てもない未来に向けて、棒のようにつながっているもの、と思いきこんでいる。暦やカレンダー、歴史年表の時間だ。去年はキリスト教暦二千年になるので、ミレニアムなどと言って騒いだが、これもキリストの死からの年月を数字で表わしたもので、一から二千まで切れ目なく棒のようにつらなっているから、そういう時間観をつくるに役買っている。

そういう時間観にとらわれているかぎり、自分の人生は紀元何年から何年までというふうにしから見られず、永遠の時のほんの短い生涯と感じ、無常観にとらわれずにいない。わたしの場合で言えば、一九二五年

生れて、二千何年かまで、無限の時の中のわずかに八十年ほどということになり、これは長命と言っているに、やはり束の間の生としか感じられない。

だが、あるところからわたしは、この考え方は間違っていると思うようになった。どこが間違っているかと言えば、外部にある物差しで自分の人生を計ることが間違っているのだ。暦とかカレンダーとか、歴史年表などは、人間が集団で社会生活を営む上での必要上作りだしたものだ。暦を作ることは、だから大昔から全

能の治者にのみ許されたことだった。人は腕時計をして分刻みで行動しているけれども、これも社会での約束事や人との会合が時間で決まっているからで、またそれではなくては人の中で共同生活はできない。

しかし、それはあくまでも、個人をこえた、人間の集団生活の必要上作られた外部的な時間である。生きている一人の人間にのみ目を向け、その人がどう生きているかを見れば、そういう外部時間だけで計れるものではないことがわかる。時間には二通りあって、外部の機械的な時間と、内部のいのちの時間がある。

わたしが生きているということにのみ目を向ければ、昨日は去つてすでになく、明日はまだ来ないから存

在しない。あるのはただ「今ココニ」という時と所だけだ。わたしはつねにその「今ココニ」を生きて、それがゴロゴロころころがつてゆくことが人生になる。そしてつねにあるその「今ココニ」は、そのまま永遠に直結しているのだから、永遠の今である。

そのところを「今ヨリ ナキニ」と柳宗悦は言うのである。宗悦はそれについてこう説明している。

《流るる時間の如きは、無常なものにすぎぬ。「即今」が「永遠」となつて、初めて時間の考えが徹する。凡ての仕事はこの「今」の仕事でなければならぬ。こうなれば古びるといふことはなくなる。時間に制約されないからである。本当の生命は、今以外にはない。古さや新しさの別とは関係がない。昨日から明日へと続くことに生命があると思うのは、妄想にすぎまい。》

わたしはこの考えにうたれ、「今ヨリ ナキニ」を心をこめて何百枚も書いた。「阿弥陀経」に、阿弥陀仏は「今現に在して説法したまふ」とあるが、阿弥陀仏は十億億の遠方にいるのでも、十劫をへた遠い昔に

(作家)